

「きゅうき」幼木の着花特性および管理法

和歌山県果樹試験場 栽培部 中地 克之

1. はじめに

「きゅうき」は有田市宮原町で「向山温州」の個体変異として発見され、2014年2月に品種登録された和歌山県オリジナル温州ミカンです。この品種は浮皮の発生が少ないうえ、12月に成熟する中生温州ミカンでありながら、早生温州ミカン並にじょうのう膜が薄く、食味が良好なのが特徴です。その一方で、枝梢が短く葉が小さい（表1）うえ、苗木定植直後に花が着きやすい性質があります（写真1）。そのため、定植後の樹冠拡大につながる適正な管理方法が求められています。

ここでは、「きゅうき」幼木の生育特性および着花時以降の管理方法について、ポット試験で検討した結果を報告します。

2. 材料および方法

1) 苗木定植直後の生育量（定植1年目における各品種間の生育）

2015年3月に「きゅうき」および対照品種「向山温州」「宮川早生」の各2年生苗木3樹を60Lポット（土壌条件をそろえた培土）に植え付け、その後定期的なかん水、施肥や枝梢管理を行うなど同一の栽培管理に揃えた後に、同年11月下旬に解体調査を行いました。

2) 着花後の管理方法と生育量（定植2年目の結実管理方法の違いと各品種間の生育）

2016年3月に「きゅうき」および「向山温州」「宮川早生」の2年生苗木を60Lポットに植え付け、適宜かん水や施肥、剪定等同一の栽培管理を行いました。翌年、全摘蕾区は5月12日に全摘蕾処理を、全摘果区は6月9日に全摘果処理を、結実区は8月10日に慣行摘果処理を行いました。その後、通常の防除等の苗木管理を行った後、11月下旬に各試験区で標準的な樹を3樹選び、そのうち1樹について解体調査を行いました。なお、結実区における慣行摘果後の果実は、11月下旬の解体調査時まで結実させました。

3. 結果

1) 品種による苗木定植後の生育の違い

「きゅうき」地上部の生育量は対照2品種より少なく、地下部が「宮川早生」と同程度で、「向山温州」より少なくなりました（図1）。

2) 着花後の管理方法と生育量

(1) 「きゅうき」の生育量は、結実区において地上部および地下部ともに「宮川早生」よりやや少なく、「向山温州」より著しく少なくなりました（図2、写真2）。また、全摘蕾区および全摘果区いずれの処理区も同様に、「宮川早生」よりやや少なく「向山温州」より生育量が著しく少なくなりました（図2、写真3, 4）。

(2) 「きゅうき」は、全摘蕾や全摘果を行った処理区において、地上部および地下部ともに結実区より多くなり、その傾向は全摘果区で強く、地上部で顕著でした（図2、写真5）

4. まとめ

「きゅうき」は、「向山温州」や「宮川早生」と比較して、幼木時の着果負担が樹体の生育に強い影響を及ぼすことが明らかになりました。そのため、苗木植栽後2～3年間は、樹冠拡大を図るためになるべく結実させないように全摘蕾や全摘果をする必要があると思われます。今後、現場での導入が進むと考えられるため、幼木から成木時にかけての効率的な管理方法や高品質化につながる結実管理について検討する予定です。

品種名	枝梢の長さ	節間長	葉身長	葉身の大きさ
	cm	cm	cm	cm ²
きゅうき	11.2(短)	1.8(中)	9.6(中)	26.2(小)
向山温州	14.8(中)	2.1(長)	9.9(中)	27.2(中)
林 温州	12.3(短)	1.9(中)	13.1(極長)	50.4(大)

※2010年品種登録特性調査データより(対照品種とも育成地のデータ)



写真1 2年生苗木植栽直後の着花状況

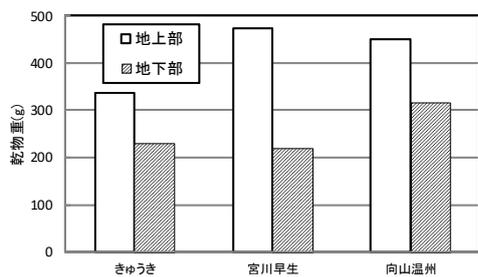


図1 苗木定植後の「きゅうき」と対照品種の生育量(2年生)
注)ポット定植:2015年3月、調査:2015年11月

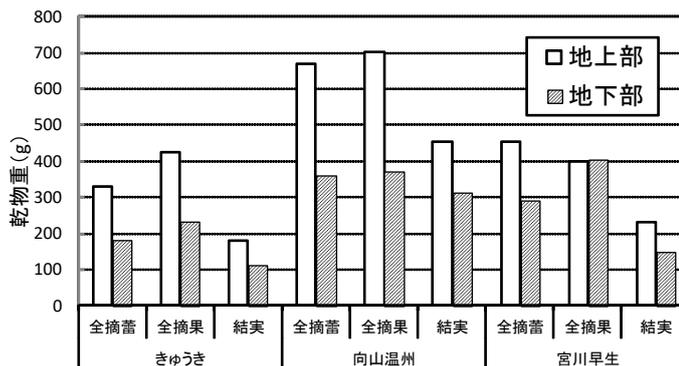


図2 「きゅうき」と対照品種、着花後の管理と生育量(3年生)
注)ポット定植:2016年3月、各区の処理は2017年、調査:2017年11月



写真2 慣行摘果(結実区)による品種別樹体状況



写真3 全摘蓄処理による品種別樹体状況



写真4 全摘果処理による品種別樹体状況



写真5 「きゅうき」着花後の管理と樹体状況